

アメリカ人が描いた20世紀初頭インドの輪郭¹⁾

——『マザー・インディア』を読む

小松久恵

1 はじめに——白人女性の英領インド表象

本稿で取り上げるコンタクト・ゾーンは植民地期のインドである。インドを訪れる欧米人女性の数が急増したのは、19世紀の後半からだといわれる。彼女たちはその訪印目的によって、大きく二つに分かれる。第一のカテゴリーは文官、将校、兵士、プランター、宣教師など、駐在する夫についてきた、メームサーヒブ *Memsahib* と呼ばれた奥方たちである。彼女たちによる旅行記、メモワール、書簡等は数多く残され、先行研究も進んでいる²⁾。メームサーヒブによる作品の多くには「観察記」としての傾向が認められる。彼女らはインドを、自分たちとは全く異質な、異国、異文化として遠くから眺め、現地と交流、接触することをできるだけ排除しようとしていた。たとえば、インド社会に無関心なメームサーヒブの様子を、1830年代に南インドに滞在したジュリア・メイトランド (Julia Maitland) 夫人の書簡 (1830年代) の一部に以下のように明白にみることができる。

インドに到着してから、この国やこの国の人々、どのようなものを観ましたか?とある夫人に尋ねた。「いいえ、何も!」彼女は答えた。「ありがたいことに、あの人たちのことは何も知りませんし、知りたくもありませんわ」[Maitland 2003 (1843): 41]。

第二のカテゴリーは、随行者であったメームサーヒブとは異なり、自ら志願して自発的にインドを訪れた女性たちである。たとえば「可哀そうな姉妹たちを救うため」[Burton 1992:137]、あるいは本国では叶わない医療の実践の場を求めて、看護師ならびに女医たちが海を渡った³⁾。また布教や救済のために、女性宣教師たちがインドに向かった。その多くは、看護学校や初等教育施設、あるいはゼナーナ (女性部屋) における婦女への教育を通じてインド社会と接触したが、彼女らが描くインドは、前者のものと比べより対象との距離が近く、そこからインド社会との積極的な交流や接触を読み取ることができる⁴⁾。本稿では、この第二のカテゴリーに属するさらに別のタイプの志願者、ジャーナリストに焦点をあてる。

アメリカ人ジャーナリスト、キャサリン・メイヨー (Katherine Mayo 1867-1940) は英領インド社会を視察しその「現実」を自国民に報告することを目的に掲げ、1926年の冬、

インドを訪れ約3カ月滞在した。帰国後、メイヨーはその「観察報告」を『マザー・インディア』(*Mother India*)というタイトルのもとで出版する。同書は出版直後から大きな評判となり、世界中で驚異的な売れ行きを記録した。社会人類学者のヴィーナ・ダース(Veena Das)が「インドについて書かれた最も悪名高い書の一つ」とするように[Das 1990:212],『マザー・インディア』はよくも悪くも非常に有名な作品であり、現在に至るまで頻繁に引用、言及されている⁵⁾。本稿では、まずこの『マザー・インディア』を当時の世論とともに紹介し、続いてそこでメイヨーが英領インドをどのように表象したのか、実際の内容を考察する。最後に、なぜ同書がシンハイわく、サルマン・ラシュディ(Salman Rushdie)の『悪魔の詩』に匹敵するような国際的なベストセラーかつ大論争の源となったのか[Sinha 1998:1],その理由を分析考察したい。

2 大ベストセラー『マザー・インディア』

1927年夏、英米両国の出版社が合同で『マザー・インディア』を出版すると、同書はインド、アメリカ、イギリスにおいて瞬く間に大きな評判を呼んだ。インドの後進性を指摘し、英国支配の正当化を主張した同書をめぐって、国内外のインド人社会からは激しい怒りに満ちた反論が、また英米社会からは興味と称賛、そして批判の入り混じった反応が相次いで起こった。ガンディー(M. K. Gandhi)、ラージパト・ラーイ(Lala Lajpat Rai)、タゴール(Rabindranath Tagor)、アニー・ベサント(Annie Besant)といった各界著名人からの反応も加わり、話題の書となった『マザー・インディア』は次々に版を重ねた。著者が所有するBlue Ribbon Books版によると、1927年から1928年の間はほぼ毎月版を重ね、1933年11月には第39版となっている。版元の一つアメリカのHarcourt Brace and Companyでは、1955年までに約40万部の販売が記録された[Sinha 2006:1]。また英語での出版から1年以内にはヒンディー、ウルドゥー、ベンガリー、マラーティ、タミル、テルグ等インド国内の主要言語へ翻訳され、ドイツ、フランス、イタリア、オランダ、ヘブライ、スウェーデン各語にも早い段階で翻訳されている。

さらに、50冊以上の関連書、反論書がインド人文学者のみならず政治・社会活動家や、インドで活動する欧米ミッション団体のメンバーなどを書き手として、相次いで出版された。それらの書名——『シスター・インディア』(*Sister India*, 1928),『ファーザー・インディア』(*Father India*, 1927),『私のマザー・インディア』(*My Mother India*, 1930),『メイヨーよりもインドをよく知っているものによるマザー・インディア』(*Mother India by Those who Knows her Better than Miss. K. Mayo*, 1927)——等から、またその多くが『マザー・インディア』出版直後に出版されていることから、同書が作家や活動家たちを強く刺激する、大きな力をもった作品であったことが推測されよう。また、国内外の新聞や雑誌にも、特に出版直後1927年の夏から1929年の冬ごろまで、書評、関連記事、読者投稿などが頻繁に掲載された。

注意深くこの著を読んだが、悪意をもって書かれたものだという印象を受けた。多数

の誤った情報が記載されている。幼児婚、寡婦問題、カースト問題、それにインド人の非衛生的な習慣が、非常に誇張されて書かれている。(Aaj紙 1927年11月9日6面)

女史は本書においてインド人の悲惨な状況を描いたが、これはかなりの部分で根拠のない、真実味に欠けたものである。この広大な国に、たった4カ月滞在し、その短い期間でインド人の特徴、性質、理念、道徳をすべて考察したという。この考察をもとに、女史は『マザー・インディア』なる悪書を書きあげたのである。(中略) 因習が存在するのは確かである。それを否定することはしない。しかし根拠のない空想や意見、わずかな事例のみに基づいて、女史はインド社会全体、特にヒンドゥー社会全体を決め付け、貶めようとしている。つまり私のみるところ、この『マザー・インディア』は穢れた血、肉、心、そしてモラルの産物でしかないのである。(後略)

(Chand誌 1927年11月号 pp. 7-16編集記 “Bharat Mata (Mother India)”)

上記は当時の主要ヒンディー紙、ならびにヒンディー月刊誌に掲載された批評である。このようにメイヨーが記した「事実」に対する疑問視が、多くの反論書に共通してみられた。上記は2本とも比較的短く冷静な批評であるが、反論文、批判本の中には、より激的な言葉で『マザー・インディア』のみならずメイヨーの人格を攻撃するものも複数存在した。

3 『マザー・インディア』には何が書かれているのか？

ではインド国内外でそこまでの騒ぎを起こした『マザー・インディア』には、いったい何が書かれていたのか。Blue Ribbon Books版を参照すると、本の構成は第1部から第5部までの全5部構成、AppendixならびにIndexを入れて440ページ、それに写真6葉でなっている。第1部から順に、視察概要ならびにインド人の特徴、女性問題、カースト問題、国内政治問題、コミユナル問題が各部で主に取り上げられている。続いてその内容をさらに詳しくみていきたい。

第1部の前半では、インド視察の目的や計画が説明される。メイヨーは自身のインド視察を、政府やいかなる団体の後ろ盾もなく個人が全くの私費で行う公衆衛生調査であり、インド全土ならびにあらゆる階層をくまなく調査するものであるとする [Mayo 1933:11-14]。しかしその実態は、多くの先行研究や当時の書評が指摘するように、英国当局やアメリカの財団から様々な支援を受けての視察であった。メイヨーの訪印目的ならびにその形態に関しては、当時からすでに以下のように疑問視されていた。

『マザー・インディア』はある特別な意図で書かれたものだと、以前からいわれている。メイヨー女史のこの著が英国議会のメンバーに無料で配布されていることが、関係者によって認められた。その資金の出所など、不明な点は多い。これらの事実が暴

露されてもまだ、メイヨー女史を誠実な女性だと評価する勇気を、あなたはお持ちだろうか？
(Pratap 1927年11月6日3面)

本書のために、女史は病院や警察署を訪れ、この国の因習、悪習を調査している。あえて尋ねることはしないけれど、メイヨーはそれほど大きな便宜を、いったい誰にはかってもらったのか？そしてその記述はどこまで信用に足るのだろうか？(後略)
(Chand 誌 1927年11月号 pp. 34-39)

また全編を通して現れる彼女のインフォーマントたちの出自から、彼女の視察ならびに取材先がカルカッタを中心とする欧米人コミュニティ、あるいは藩王、族長、洋行帰りのエリート、といったインド社会のごく一部に偏っていたことが明白である。

後半ではインド人の特徴が取り上げられるが、メイヨーがインド人をヒンドゥー教徒と同一視していることがすぐに明らかになる。彼女はインド人の性的過多を繰り返し主張し、「幼年期から性に耽溺しているため心身ともに虚弱」なインド人は「ヒンドゥー哲学が責任転嫁と現実逃避をもたらす」ため、自治にふさわしい能力をもたないと結論づける [Mayo 1933:18-32]。彼女のこの主張は、この後も全編にわたって繰り返されることになる。

第2部では女性問題が主に取り上げられている。まずメイヨーは、インド社会において女兒が誕生の瞬間から忌避の対象とされていることを、様々な事例とともに語る。そして、病院での男児誕生時の家族の喜びぶりを対照的に描くことで、男児優先の実態を強調する。次にメイヨーは寡婦が置かれた惨状——夫の死後は断髪して婚家の使用人の身分となり、1日1食しか与えられず、頻繁な断食が課され、あらゆる祝祭儀式から排除される——を記述し、寡婦再婚がいまだに認められない現状を指摘した。続いてインド女性の出産をめぐる環境が非常に厳しいものであることが紹介されるが、ここでの描写は非常に生々しく臨場感あふれるものであり、メイヨーがかなり力を入れて執筆した部分であったことが推測される。特に産婆(ダーイー)がいかに無知で迷信に満ち、不衛生な存在であったかが強調されており、同時に欧米の女医の存在が彼女らにとっての唯一の救済であることが主張された。

女性隔離(パルダール)の慣習について述べられた章では、その慣行が女性の依存心や隷属性を高め、さらに結核を蔓延させていることが具体的な数字とともに指摘されている。同時に、洋行帰りのインド女性の口から、イギリスでの生活は「自由に満ちた」「パラダイス」でありインドでの生活は不自由極まりないと語らせており [Mayo 1933:115]、メイヨーがイギリスとインドを完全に二項対立の図式にあてはめて描写していることが明らかである。

全体を通して、メイヨーはインド女性を一面的にしか描いていない。メイヨーの描く上流階級の女性たちは、隔離され不自由な生活を送り、そして寡婦再婚禁止に縛られている。また下層の女性たちは、不衛生なお産や横暴な夫の被害者としての姿が語られるのみである。女性たちは誕生の瞬間から幼少期、結婚後、出産、夫の死後と生涯を通じて苦しみの

局面のみが強調され、それぞれ享受したはずの自由、権利についてはまるで言及されないのである。

第3部ではカースト制度、特に不可触民をめぐる問題と、インドの教育制度に対する批判が主に扱われている。全体を通して、ここではメイヨーは自身の体験に基づいた記述ではなく、インド国内外の識者の意見を引用することを中心としている。前半部でメイヨーは、反バラモン勢力が著しいマドラス（現チェンナイ）を取り上げ、当地の低位カースト出身の政治家の口を借りてバラモン批判をする。続いてカースト制度と、それを容認、肯定してきた大多数のヒンドゥー教徒が批判され、同時に、不可触民の権利拡大に努めている欧米の宣教団体ならびにイギリス政府の功績がたたえられる。そして英国統治こそがインドに救済をもたらす「光」であると結論づけられている。

後半ではインドの教育制度が批判されている。まず、カースト最高位のバラモンが教育を独占していたインドに、万遍なく教育をもたらしてくれたのはイギリスだ、とインド人政治家の口からイギリス統治支持が語られ、続いて西洋教育の普及に尽力した政治家、教育者たちの活動が紹介されている。ここで興味深いのは、いわゆる西洋近代教育を受けたインド人エリートたちが、その知識を国の発展のために活用していない、とメイヨーがしきりに指摘している点である。彼らは公職を得、名声を得るためだけに大学教育を受け、それ以外の職につくことをかたくなに拒む。それをメイヨーは「インド人の利己的な精神構造」だと批判する。メイヨーの主張によれば、その「利己的な精神構造」ゆえに、農村部や不可触民、そして女性への教育が普及せず、インドは貧困のままなのである [Mayo 1933:194-195]。

第4部では、インドの発展を妨げている要因が考察され、インドの貧困や困窮はイギリス支配がもたらしたものではなく、インド人自身に責任があるということが繰り返し主張されている。まずメイヨーは、インドでは近代技術に基づいた「酪農」という概念が普及しておらず、非常に原始的に牛が使役されていることを指摘する。西洋近代の知識が欠如しているために、劣悪な品種は改良されず、また飼料不足や過放牧を招き、結果として経済効果が上がらない。メイヨーの指摘はもっともであるが、欧米とインドではそもそも気候が違う点や、それを補う灌漑設備がほとんど普及していない点に関して、メイヨーが一切言及していない点についても留意すべきであろう。加えて家畜が非常に残酷に扱われており、牛保護協会による保護が名目のみであることが強調されている。牛保護舎 (*gaushala*) がいかに不衛生で、かつ不的確な管理のもとにあるのかについて、メイヨーは自身の経験や数名のインフォーマントの証言をもとに熱心に描写している。神聖視されているはずの牛が非常に残酷に扱われていることを、メイヨーは西洋的な動物愛護の観点から繰り返し非難すると同時に、屠殺業者に抵抗なく牛を売りながら、ムスリムが犠牲祭で牛を殺すことには過剰に反応するヒンドゥー教徒の二面性を指摘している。

続いてインド統治法の改正が取り上げられ、インド人議員が各々の帰属カーストや宗教コミュニティの利益のみを追求していると批判される。ここでメイヨーが統治法改革案自体を疑問視することはなく、ただインド人に政治を任せると不正が起こるということが示唆されるのみである。メイヨーはまた、英国人理事官が在住する藩や、英国での教育を受

けた藩主のいる藩、つまり英国の影響下にある藩は近代的かつ平和であり、一方でそうでない藩は「アラビアンナイトの無修正版」のように混沌としていることを強調した [Mayo 1933:308]。全体を通して、インド人支配者や行政者がもたらしている混乱、不平等、搾取と、英国統治がもたらした進歩、正義、平和が対照的に描かれており、ここでもまた、英国による統治こそがインドに光をもたらしたという主張が繰り返された。

最終部である第5部の前半では、コミユナル問題が取り上げられている。メイヨーの主張によれば、ヒンドゥーとムスリムの対立、断絶こそがインドの現状の最大要因の一つとなっている。メイヨーは、インド各地での両者の対立による暴動を紹介し、その仲介には常に英国が必要とされていることを主張する。両者にとって英国は「良き友人かつカウンセラー」であり、公平な統治をもたらすものである [Mayo 1933:334-335]。メイヨーは宗教暴動をいくつも書きたてた目的を「宗教原理がもつ恐ろしい性質を、政治家や理論家を利用して指摘すること」だとするが [Mayo 1933:334]、その一方でヒンドゥー教徒とムスリムが全く別の人種であるかのように、それぞれの特徴を羅列し、またムスリムによるヒンドゥー教徒批判をいくつも紹介する。意図的にせよ、そうでないにせよ、メイヨーはそうすることで両者の差異を強調し、その対立に加担しているのである。

後半では再び公衆衛生に話題が変わり、インド国内の代表的な聖地がいかに非衛生的であるかが描写される。メイヨーがどれほど自覚していたのかは不明であるが、ここにも西洋的な二項対立的視点が働いている。代表的聖地をあえて取り上げ、その地の衛生状態を問題視する背後には、「聖地＝清浄」という前提が存在していよう。さらに、迷信と伝統医療を過信するインド社会の後進性が強調され、その後進性が様々な病原菌の蔓延を促し、インドが「世界的脅威」(the world-menace) になりかねないということが生々しく語られている [Mayo 1933:366-378,379-388]。

最後に「真実を指摘したため批判が相次ぐだろうが、最終的には受け入れられるであろう」というごく短い「結論」が記され [Mayo 1933:408]、メイヨーがすでに激しい批判を予想していたことが明らかである。

以上のように、第1部から5部においてインド人の特徴、女性をめぐる様々な問題、衛生観念、カースト、教育、政治、宗教、と取り上げられたテーマは多岐にわたる。しかし全編を通して読むと文章の濃淡が非常に明白であり、そこからメイヨーが最も力を入れたのが第1部と2部であったことが容易に推測される。全体を通して、繰り返しメイヨーが主張したのは、ごく簡単にいうならばインド人は衛生観念にかけ、迷信にとらわれた民族であり、女性やアウトカースト(不可触民)を虐げ、ひどく利己的でモラルを尊ばない。すなわち非常に後進的な民族であるがゆえに、イギリスの助けが必要であり、自治には適さない、ということであった。

4 何が人々をひきつけたのか？

しかし、植民地支配を正当化するためのインド社会ならびにヒンドゥー文化を批判する言説は、20世紀半ばにはすでに存在していた。それがなぜここまで大きな反響を呼んだの

か。その要因として、インドが世界的な関心を集めるようになっていた当時の政治的な背景に留意するのは当然のことであるが、加えて注目すべきはメイヨの表象方法である。

『マザー・インディア』におけるインド表象には、いくつかの特徴がみられる。第一に、二項対立的な描き方があげられる。たとえばインドの風景を描くとき、メイヨは常に土着の文化に根ざした、いわゆる「インド的な」風景と、西洋近代的なそれを並べる。カルカッタにある有名なカーリー寺院の描写は、人々の喧騒、ひっきりなしに聞こえる生贄のヤギの断末魔の悲鳴、血しぶきと人いきれでむせかえるような薄暗い寺院、まだ温かい血にありがたがって殺到する女性——と、臭いと音、空気までもが想像できるほど執拗に描かれる。そして生々しい描写に息苦しくなったころ、メイヨは、そして読者は、待たせていた車にのりこみ、ジェネラルホスピタル、ビショップハウス、いくつものクラブ、シアターを通り過ぎて広々とした近代文明の象徴のような都市部へと向かう [Mayo 1933: 3-10]。また現パキスタンのインド国境に近い都市、ラホールを描写するときには、「アメリカ西部なみ」の広々とした風通しのよい新しい近代建築物が並ぶ欧米人居住区と、汚水が垂れ流される入り組んだ路地や混雑した市場が続けて描写される [Mayo 1933: 361-362]。そうすることで土着文化は不衛生と混沌が、そして近代文化は清潔で新しく整然としたイメージがより強調され、読者に強い印象を与えることになる。

人々の描写に関しても同様である。メイヨは非科学的で迷信の闇にとらわれた現地の人々と、西洋近代教育を受けたエリートを並べて描写する。また産婆や伝統医療であるアーユルヴェーダ医師による治療——割れた竹、古びたブリキ缶、ガラス片、調理用ナイフ、牛糞を使用して——が、いかに原始的で不衛生か、詳細な描写で生々しく治療の場を描いたあと、メイヨは場面を近代的な病院と欧米人医師のもとへと移す。そうすることにより後進的で不衛生な土着文化と、闇に光をもたらずかのような先進的、科学的な近代文化が互いを強調しあうのである [Mayo 1933: 90-110, 379-388]。

人物をめぐる二項対立表象の一つに、ヒンドゥー対ムスリムがあげられる。しかしこの部分は、これまでの「西洋対インド」という単純な図式にはあてはまらない、非常に興味深い部分である。メイヨは各民族、分布地域、宗教区分を混同している。彼女が描く図式では、北の民 (northern race) はスィク、パターン、ムスリム、そして南の民 (southern race) はヒンドゥー教徒というふうに分類される。武力を尊び、身体能力に恵まれた、いわゆる男らしいムスリムと、頭の回転が速く、デスクワークに長けた小柄な、いわゆるフェミニンなヒンドゥー教徒 [Mayo 1933: 380]。ここではすでに普及していた「女々しい」ベンガル人イメージを、メイヨが意識していたであろうことが推測される。メイヨはイスラーム教徒のパターンの指導者たちに非常に深い感銘を受けたらしく、その男らしい身体の描写に力を入れ、彼らの証言を多く引用している [Mayo 1933: 321-323, 343-354]。「あの南の小さなやつらのことを本物の男だと認めたことは一度もない」 [Mayo 1933: 347] などというヒンドゥー教徒に対する彼らの評価にメイヨの視点は同化し、両者を並べて描くとき、常に彼女はムスリムに肩入れする。その肩入れはどこからくるのか。先にも述べたとおり、メイヨはインド人をヒンドゥー教徒と同一視し、ヒンドゥーの教えや慣習がインド人の人格形成に影響を及ぼし、インドの発展を妨げていると

主張する。彼女にとってヒンドゥー教徒はこの非難すべきインド文化を代表するものであり、ムスリムはそうではなかったとみるべきなのか。それともパターンの「男らしさ」に彼女が魅了されたからとみるべきなのか。⁶⁾メイヨーは第5部で両者の対立を扇動し利用する政治家の存在を示唆したが、自身もそれにある意味で加担していることをどれほど意識していたのか。それらも含めて、今後さらに考察を深めたい点である。

第二の特徴として、「引用」の使い方があげられる。メイヨーは政治家や医師、また様々な指導的立場の人々の証言を多く引用した。加えて『国勢調査報告書』や議事録等の公的な資料、具体的な数字も多用している。そうすることで、記述が客観性に満ちた、正確なものであるという印象を読者に与えている。しかしそれらの記述を注意深く読んでみると、信憑性に欠ける部分が多々あることが判明する。たとえばインフォーマントをみると、その大半がインド在住の欧米人ならびに欧米留学経験者に限られている。さらに彼らの多くはその職業とインド滞在経験が記されるのみであり、氏名すら明らかにされていない。また引用元の資料そのものについても、公的な、いわゆる客観的な資料と、主観に満ちた旅行記や手記といった全く性質の異なる情報を同じように扱い、メイヨーは読者の前に「事実」として差し出している。しかししばしばその「事実」には、根拠が欠けていることを指摘せざるを得ない。たとえば幼少期からの性への耽溺が原因で、インド人男性は若いうちから虚弱であると紹介するとき、「25—30歳男性の10人中7, 8人は不能である」[Mayo 1933:28]と彼女は述べる。また女性隔離の風習を紹介する際には「結婚してから死ぬまで、外の世界をみることはない女性の数は1125万~1729万である」[Mayo 1933:119]という数字を提示する。さらにインドで蔓延している様々な病気の一例として「鉤虫」(hookworm)を紹介し、その推定キャリアは「マドラスで人口の80%, ベンガルで60%である」[Mayo 1933:374]とする。このようにデータの引用元が明示されないまま、もっともらしい数字だけが記されている。メイヨーは様々な質の情報を意図的に混ぜあわせ、いかにも自身の論が事実に基づいているかのようにアピールする。しかし実際は、その「事実」は大いに疑わしいものであった。

第三の特徴として、情報の意図的な取捨選択である。『マザー・インディア』の全編を通して、強調、誇張されるのはインド人の後進性である。それらは主に性的過多と衛生観念の欠如という形で、あらゆる章において非常に詳細かつ熱を込めて描写される。それとは逆に、不自然に省略された事象がいくつかある。たとえば女性とその生活をめぐる描写である。もちろん幼児婚ゆえの強制的な性交渉による若い被害者や、不衛生で危険な出産を強いられた患者など、メイヨーは「対象」としての女性については多く描いている。しかし彼女が一個人として向き合い、対話した女性は、そのほとんどが西洋人女医に限定されている。また、西洋風の衣類をまとったりイタリア紳士のようなマナーであったりと、その描写から男性インフォーマントのたたずまいを想像することは可能である。しかし、メイヨーの記述から、インド女性の姿、中でも日常生活を想像することは、非常に困難である。メイヨーは『マザー・インディア』支持者たちから「インド女性の擁護者」(champion of Indian women)と称賛された。しかし、彼女がインド女性自体に関心があったと評価することはできない。女性に対するこの無関心さは、多くの西洋人女性がそ

の関心、あるいは好奇心をゼナーナ（注4参照）の内側に向けたことと非常に対照的ですらある。

また、インド人が主導する様々な改革活動も、『マザー・インディア』で触れられなかった事象である。同書において言及されたインドの社会改革活動は、常にキリスト教団体、あるいは英国政府が主体のものである。寡婦再婚運動や幼児婚禁止の働きかけ、あるいは女子教育普及活動など、当時盛んに行われていたインド人指導者による活動は、ほとんど紹介されていない。また、メイヨーが同書で最も多く取り上げた個人はガンディーであった。彼女はガンディーの言葉を頻繁に引用し、また幾度も彼について言及している。しかし「元指導者の影響力が衰えた今、彼の言葉には説得力がない」[Mayo 1933:19]という言葉に表れるように、メイヨーのガンディーに対する評価は常に否定的なものであった。

5 おわりに

『マザー・インディア』に描かれた公衆衛生、特に性をめぐるトピックは、それ自体が非常にセンセーショナルなものである。そしてメイヨーのドラマティック、かつ（イエロー）ジャーナリスティックな文章は、たとえそれが興味本位からのものであったとしても、読者をひきつける力を十分にもっていた。さらに前章で述べた特徴が『マザー・インディア』に散見された。中でもメイヨーの推測や憶測に基づいた記述、あるいは誇張して書かれた描写と、事実が混在していた点は、同書が大きな反応を呼んだ最大要因であったといえよう。記述のすべてが虚偽にすぎなければ、議論に値しないとただ黙殺すればよい。しかし、認めざるを得ない社会問題が同書にはいくつも含まれていたために、特に社会活動家たちにとってメイヨーの主張を完全に無視することはできなかった。この事実と虚偽の混在が、意識ある人々の怒りや憤りを強く掻き立て、世論の沸騰につながったのだと思われる。

今後はさらに、本書に対する彼らインド人からの反論、批判の具体的内容を吟味する必要がある。その記述は、まさにプラットが言及する、コンタクト・ゾーンにおいて生じる「対抗的な表象」である。彼らは『マザー・インディア』のどの部分に反応したのか。何を肯定し、何を否定したのか。たとえば数少ないインド女性の反論者、チャンドラワティ・ラカンパル Chandravati Lakhanpal は、メイヨーの指摘を部分的に認めつつ、西洋社会の悪習を取り上げて批判の投げ返しを行っている [Lakhanpal 1928]。また最も詳細な反論本の一つ、『アンハッピー・インディア』(*Unhappy India*) 1928において著者ラージパト・ラーイは、インドの悪習を認めながらもそれらはすべて植民地支配が要因である、と社会問題の要因をイギリスに帰した。その他にもメイヨーへの人格攻撃や、情報の真偽への疑問視など、反論批判にはいくつものパターンがみられる。これらのインド人反論者による記述をさらに分析することは、彼らが理想としたインド、彼らにとっての「マザー・インディア」の姿を浮かび上がらせる。インド人がインドならびに自身をどのように認識していたのか、その輪郭を明確にすることを、次回の試みとしたい。

注

- 1) この論文は新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」(2008-2012年度)の成果の一部である。
- 2) 代表的なものとして粟屋 [2001], Barr [1976], Ghose [1998], MacMillan [1988], Maitland [2003], Parks [1975], Robinson [1993], Sen [2008] などがある。
- 3) 英領インドで活躍した西洋人女性医師に関する研究としては, Jayawardena [1995:75-90], Forbes [2005:79-140], 出島 [2006,2008] などがある。
- 4) Forbes [2000] は, 宣教師の女性と現地社会との間に心情的な交流はほぼなかったとする。しかし数名の女性宣教師による日記を読む限り, その指摘を鵜呑みにすることはできない (Leaves from our Ongole Diaries 1934 in American Baptist Foreign Mission Societies Record 1817-1969 (マイクロフィルム) 参照)。女子教育現場, 中でもゼナーナという小さな, 閉ざされた空間は, 植民地における邂逅の空間そのものである。インド女性からの反応を含めて, 今後, 資料の発掘ならびにより一層の吟味が必要な分野である。
- 5) 代表的なものとしては以下 Jayawardena [1995] は『マザー・インディア』が幼児婚禁止法成立に貢献したという観点から, Das [1990] と Mukherjee [1990] はアメリカ人が描くインドを舞台とする文学作品論の一部として, Sinha [1998] は『マザー・インディア』の抜粋版, ならびに最も大部かつ詳細な『マザー・インディア』研究 [2006], Burton [2003] はメイヨー支持者であった唯一のインド人女性, コーネリア・ソラブジー Cornelia Sorabji との関連から, また Sen [2008] は白人女性のインド描写の一例として, それぞれ『マザー・インディア』ならびにメイヨーを取り上げている。その他, メイヨー並びに『マザー・インディア』を取り上げた論文は多数あるが, 代表的なものとして, Liddle & Joshi [1985], Wilson [1997], Joseph & Kavoori [2007], Nadkarni [2008] などがある。

テキストとして現在容易に入手できるものとしては, 1998年出版の抜粋版 *Selection from Mother India* があり, また電子版 <http://gutenberg.net.au/ebooks03/0300811h.html> で全文を読むことができる。

- 6) メイヨー批判の中には, 「欲求不満のハイミス女性」や「セックス狂」(sex-mad) というレッテルがある。性に関して問題を抱えているから性に関することばかりが目につくのだ, という主張である。しかしメイヨーの生涯の「友人」Moyca Newell (ニューウェルに関しては Sinha [2006:69-71,73] や James & James [1971] 等参照。1910年に会って以来, ニューウェルはメイヨーの取材旅行を支援し続けた。1940年にメイヨーが亡くなったのは, ニューウェルの自宅であった。)の存在を考えると, この批判は的外れにみえる。彼女の性的嗜好については憶測の域を出ない。しかしパターン族の「男らしさ」への拘りや, 「性的加害者」としてのヒンドゥー男性の描き方を考察するとき, そこに「欲求不満のハイミス」の視線以外の, 何らかの意味がある可能性に留意しておきたい。

参考文献

- 粟屋利江 2001 「白人女性の責務 (The White Woman's Burden) ——インド支配とイギリス女性をめぐる研究動向」『歴史評論』612: 63-77。
——— 2007 「書評 Mrinalini Sinha, *Specters of Mother India: The Global Restructuring of an Empire*」『アジア経済』48 (8): 83-88。
- 出島有紀子 2006 「インドに対する英国人女性の使命と女性医師の正当化, 1875-77年」『桜美林英語英米文学研究』46: 43-57。
——— 2008 「英国における女性医師の専門職化と表象のインド, 1877-1900年」『桜美林英語英米文学研究』48: 15-32。

Aitken, Maria 1988 *A Girdle Round The Earth: Women Travelers and Adventures*. London: Robinson Publishing.

- Barr, Pat 1976 *The Memsahibs : The Women of Victorian India*. London: Secker & Warburg.
- Burton, Antoinette 2003 *Dwelling in the Archive*. New Delhi: Oxford University Press.
- Candy, Catherine 2001 The Inscrutable Irish-Indian Feminist Management of Anglo-American Hegemony, 1917-1947. *Journal of Colonialism and Colonial History* 2 (1) : 1-19.
- Das, Veena 1990 The Imaging of Indian Women: Missionaries and Journalists. In S. R. Glazer & N. Glazer eds. *Conflicting Images : India and the United States*. Tewksbury, M. A.: Riverdale Company Inc., pp. 203-220.
- Forbes, H Geraldine 2000 In Search of the 'Pure Heathen': Missionary Women in Nineteenth Century India. In Alice Thorner ed. *Ideals, Images and Real Lives : Women in Literature and History*. Mumbai: Orient Longman, pp. 68-90.
- 2005 *Women in Colonial India : Essays on Politics, Medicine, and Historiography*. New Delhi: Chronicle Books.
- Ghose, Indira 1998 *Women Travelers in Colonial India : The Power of the Female Gaze*. New Delhi: Oxford University Press.
- Gooptu, Suparna 2006 *Cornelia Sorabji : India's Pioneer Woman Lawyer*. New Delhi: Oxford University Press.
- James, Edward T. & Janet Wilson James eds. 1971 *Notable American Women : A Biographical Dictionary*. Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press.
- Jayawardena, Kumari 1995 *The White Woman's Other Burden : Western Women and South Asia During British Rule*. New York: Routledge.
- Joseph, Christina A. & Anandam P. Kavoori 2007 Colonial Discourse and the Writings of Katherine Mayo. *American Journalism* 24 (3) : 55-84.
- Lakhanpal, Chandravati 1928 *Mother India Ka Javab*. Kangiri: Guruku-Yantralaya Gurkul.
- Liddle, Joanna & Rama Joshi 1985 Gender and Imperialism in British India. *South Asia Research* 5 (2) : 147-164.
- Lokuge, Chandani ed. 2001 (1934) *India Calling : The Memories of Cornelia Sorabji, India's First Woman Barrister*. New Delhi: Oxford University Press.
- MacMillan, Margaret 1988 *Women of the Raj*. New York: Thames and Hudson.
- Maitland, Julia (introduction, notes and appendices by Alison Price) 2003 (1843) *Letters from Madras : During the Years 1836-1839*. New Delhi: Oxford University Press.
- Mayo, Katherine 1933 (1927) *Mother India*. New York: Blue Ribbon Books.
- Mukherjee, Sujit 1990 The Indias of American Fiction. In S. R. Glazer & N. Glazer eds., *Conflicting Images : India and United States*. Tewksbury, M. A.: Riverdale Company Inc., pp. 221-240.
- Nadkarni, Asha 2008 "World-Menace": National Reproduction and Public Health in Katherine Mayo's *Mother India*. *American Quarterly* 60(3) : 805-827.
- Nair, Janaki 1990 Uncovering the Zenana: Visions of Indian Womanhood in Englishwomen's Writings, 1813-1940. *Journal of Women's History* 2 (1) : 8-34.
- Natrajan, K. 1928 *Miss Mayo's MOTHER INDIA : A Rejoinder*. G. A. Madras: Natesan & Co.
- Parks, Fanny 1975 *Wanderings of a Pilgrim in Search of the Picturesque*. Karachi: Oxford University Press.
- Rai, Lajpat 1928 *Unhappy India*. Calcutta: BannaPublishing Co.
- Ramusack, Barbara N. 1992 Cultural Missionaries, Material Imperialists, Feminist Allies: British Women Activists in India 1865-1945. In Nupur Chaudhuri & Margaret Strobel eds. *Western Women and Imperialism : Complicity and Resistance*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, pp. 119-136.
- Robinson, Jane ed. 1993 *Unsuitable for Ladies : An Anthology of Women Travelers*. New York:

- Oxford University Press.
- Sen, Indirani ed. 2008 *Memsahibs' Writings : Colonial Narratives on Indian Women*. New Delhi: Orient Longman.
- Sinha, Mrinalini 1998 *Selections from Mother India*. New Delhi: Kali for Women.
- 2006 *Specters of Mother India : The Global Restructuring of an Empire*. New Delhi: Zubaan.
- Wilson, Liz 1997 Who is Authorized to Speak? Katherine Mayo and the Politics of Imperial Feminism in British India. *Journal of Indian Philosophy* 25 : 139-151.
- World Citizen 1928 *Sister India : A Critical Examination of and a Reasoned Reply to Miss Katherine Mayo's 'Mother India'*. Bombay: Sister India Office.